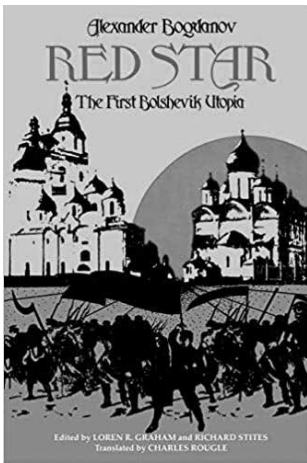


## 無償・虚無・抽象——知性史の 中のささきふさ (1897-1949) —— (2)

早矢仕 理宇



### 1918年の港都にて

2022年現在からさかのぼること104年、ロシアで2月革命の起きた翌年である1918年、当代の知人ささきふさは、港都の水辺を歩いていた。「ファミレイの談笑に疲れ切つて家を抜け出して来た私の歩みは自づと海の方へ引かれてゆく。(略)忙しげに風を切つて走り廻る皮膚の黒ずんだ労働者等の視線をくゞつて私は萬国橋から波戸場の中に入った」。指路教会近くにあった養家から歩いて15分ほどの同所を、ささきは、時々ひとりで訪れていたらしい。「私は過ぎし日の稚気をなつかしみながら、石畳の上

に浮んだ線路の上を身軽に渡つてゆく」。

闇に光る細い線路の上を、一方から他方に走ってゆかねばならぬのが人生。「一寸」でも止まれば、後から来たヤングジェネレーションがのしかかり、行く手の闇に切り込めば、先行く者の群れがつかえる——。海辺に着き、さらに石畳の端をあやうい足取りで歩いていくと、最近水死した友のことが胸に浮かんだ。「一步ふみあやまれば奈落の底が私達を待ってゐる、不安な魅力に引きつけられながら、而もふみ止まつて堅實な路を選んでゆくところに人生の苦痛も悲哀もあり、その悲哀をかみしめる所にいひしれぬ寂しい喜もあるのだ」。

だが、わき目もふらず足下に気をつけ、一直線に走り続ければよいものか？ 冷たい水の面に

も、レオニド・アンドレーエフ描く革命に殉じた青年の眼に映った空がのぞき、その青のなか軽く走る船が手招きする。「然し始は港より港に水面をはつてゆく。そして又もとの港につてくる。私にはそれがまだるつこくてたまらない。私は飛昇したいのだ。よし一足飛びに飛び上がれないまでも、一切の此世の重荷をすてゝ、萬有の主在し給ふ天への梯の一段々々を垂直に上がつてゆき度いのだ」。

### 文学史再考——「正典」が締め出すもの——

上述した「灰色の街」(キリスト教機関紙『六合雑誌』に掲載)は、ジョージ・ギッシングの句の引用からはじまっている。ささきの文章には、ギッシングのように現在ではなにかば忘れられた作家が数多く登場するが、彼らのマイナー性は、絶対的なテキストの質によるものなどではない。フランコ・モレットティが指摘するように、文学作品には「屠場」が存在する。彼は、その要因として、学界の外の空間でカノン(正典)が選ばれ、連続的な需要がその他大勢をいわば闇に葬る例を、検証を踏まえて示す。

そう、文学史に確たる場を占め、賞にまでその名が冠されるような大家の作品のほうが、屠場に追いやられた名もない人物の作品より読むべき価値があるか？ と問えば、「まさか」と答えるしかない。たとえば、国語の教科書で芥川龍之介の作品に接した場合、こどもたちは、それを「傑作」と思うよう導かれている。だが、こと読書体験に限らず、当人における生のリファレンスが豊富になったのち、同じ作品に対する印象や評価が変わるのはむしろ自然ではないか。

とはいえ、「文豪」や「天才」の作品を、屠場送りにし、カノンの変更を企てることがただししいというでもない。そうではなく、モレットティが提案するごとく「文学史すべてに対する目の向け方の変更」を目指し、現時点でカノンとなっている

るものも、いないものも、まず同列に置く態度が、もはや基本とされねばならないのだ。

## 新・社会主義文学

近年、モダニズム期の雑誌の復刻が相次ぎ、周縁化されていたささきの存在にも、言及の及ぶことがあったが、それらはごく表層的なものにとどまっている。その根本的な原因に、「モダニズム」の語を、カタカナ語として定着した今日の「モダン」に結びつけるような出発点からの錯誤が挙げられる。すなわち、より大きな歴史的文脈から「モダニズム」を問おうとせず、レトロスペクティブな視点で、具象的な事物や出来事を小さく切り取り、まとめてしまう態度に疑問が抱かれていない。そこでは、「都市の高等遊民」、「貧困にあえぐ同時代の下層階級には関心がなかった」（森まゆみ『断髪の新モダンガール』）などという言説も、容易に再生産されることとなる。

だが、キリスト教青年として出発し、近代文学における「啓蒙」の系譜から書くことに就いたささきは、社会や他者に関心がなくどころか、つねに惨憺な観察眼で文明批評をおこなった。とりわけ、日本のモダニズムのピークとされる1930年、ささきは「新・社会主義文学」とでも形容されうのような作品を、次々と生み出している。

「あれも私」は、自殺した養父をしのぶ会の場面からはじまる。養母の身になり、一同の思惑を気遣う「私」と、唯一クリスチャンでないらしい「彼」は、ふたりが「先生を自殺に導いたのではなかったか」という無言の圧迫にさらされている。その彼は、養母から「金を借りて来いと私に迫った」。窮境に立たされ養家に足を運ぶと、20年前破産しかけ、社会的地位の高い亡父の事務室によく現れた「おろく」が茶の間にいた。遠回しに要求をつきつけてくる彼女に、私は手持ちの紙幣を渡す。兄は、私の話を聞くと「結局我我（筋骨の代わりに教養を与えられた）は、冷酷になるか、（社会）運動に身をぶちこむか」しかないのでは、と言う。

「誰のダイヤ」には、判で押したように出勤、帰宅を繰り返す、物事に感動を示さない婿養子の敬太に違和感をおぼえた篤子が、身分を隠しカフェの女給として働く経緯が描かれる。彼女は、そこで出会った本能を隠さない男性や、身売りま

でして模造ダイヤを身につける女性たちに、一種の人間味を感じる。だが、女給らが羨望する篤子のダイヤは、母の形見で、あらゆる所有物のため自身を投げ出した経験がないと気づいた彼女は「何か裸で宙を泳いでゐるやうな気がした」。その後、篤子は、義足をつけた無一文の青年に誘われて踊り、小屋のような自宅に招かれると、ダイヤを彼に差し出す。「不思議に彼女は幸福だつた」。

先稿で取り上げた「ただ見る」とは一見異なり、物語構造を挫く意思のみとめられない二つの作品だが、モチーフから連想される通俗性は後景にしりぞき、語り手の「視」の覚醒が際立つ。とりわけ、両作品の最終場面「おろくに與へたあの金は、ことによると、私が私自身に與へた金なのかも知れなかつた」（「あれも私」）と、「勿論それは一時皆済の幸福だつた」、「同時にパパ抜きのパパを譲つた幸福でもあつた」（「誰のダイヤ」）は、透徹した省察において共振している。

## きたるべき人間を嘉す——科学と宗教の相克と融合——

ささきが愛読したジョージ・ギッシングが、オーギュスト・コントに傾倒していたころ書いた『暁の労働者たち』（1880）の主人公には、キリスト教信仰に代わるものとして、実証哲学に救いを求める女性が据えられている。ささきは、『多點的存在』（1926）で、「メンタリズムの洗禮を受けた近代人は、多かれ少なかれオーギュスト・コントの末流を汲んでゐるといつても差し支へないだらう」と述べる。

諸科学の最高位に、社会学を打ち立てたコントは、革命後の混乱が収まらないフランスで、人間存在の体系化を図ろうとこころみ「人類教」を創始した。そこには垂直的な超越「神」が存在せず、水平方向の精神が重視されており、科学の形而上学化との共通点もうかがえる。

それから半世紀を経た1909年、アナトリー・ルナチャルスキーは、『文学の崩壊』で「神とは人間、まさに社会主義的人類のことである」と記す。第1次革命（1905）の失敗から、ボリシェヴィズムの代表的な知識人たちは、マルクス主義を基盤とし、プロレタリアートを神とみなす宗教、いわゆる「建神主義」を創出しようとしていた。

この思想に共鳴したマクシム・ゴーリキーは、

## 「鳥屋だい」とは誰か ー日本初の女性 プロテスタント信者を推理するー (1)

中島 一仁

### はじめに

1869年1月(明治元年12月)、横浜で女性としては日本最初のプロテスタント信者である「鳥屋だい」が洗礼を受けた。

「女性初」ということに注目することに特段の意味はないとの考え方もあるかもしれないが、彼女の受洗から100年余り後に同教会の牧師を務めた井上平三郎氏は著書で「男も尻込みしたキリスト教禁制下で、このおばあさんが、家族縁者とも関係なく、よく信仰に決断したと思う」<sup>i</sup>と述べている。しかし、彼女に関しては、井上氏が同書で洗礼と死去のことしか記録がないと述べているほどで、詳しいことはほとんど分かっていない。禁教下、キリスト教信仰の道に入った老婆のことを少ない手掛かりのなか、できるだけ解明してみたい。

### 1. どこ誰なのか

#### ①「海岸教会人名簿 第一号」

鳥屋だいの受洗の事実を示す最も基本的な史料は、先述の横浜海岸教会に残る「海岸教会人名簿 第一号」<sup>ii</sup>だ。同教会所属の信徒を年代順に記したこの史料には次のように書かれている(実際は縦書き、「事故」など四つの欄は無記載のため省略)。

受洗	族籍	姓名
入会	現在	生年月
(略)		
全二年一月 タムソン氏ヨリ	宮津藩士	鈴木鉦次郎
全	本県平民	鳥屋だい

「受洗」欄に「全」とあるのは前列の「鈴木鉦次郎」の記載を受けており、内容としては「明治二年一月 タムソン氏ヨリ」である。洗礼を施した「タムソン」とは、1863年来日し横浜で活動していた米国長老教会の宣教師デイビッド・タムソン(David Thompson)である。

族籍は「本県平民」、すなわち神奈川県の平民とされている。以上が記載内容である。

#### ②横浜海岸教会の「公会名簿」

当初、人間性の賛美や神格化を唱える個人主義者であったが、『個性の崩壊』(1910)で一転し、集団主義を主張するようになる。そして彼は、集団的な不死を至高のものとし、後から来るよりすぐれた神聖なひとびと、死を克服するであろうひとびとのため、われわれは不可避免的に消滅するのだと語る。ささきの兄・長岡義夫は、前述した作品群が妹により書かれる1年前の1929年、ゴーリー全集の翻訳に携わっていた。

建神主義の理論的支柱となったアレクサンドル・ボグダーノフは、1903年、ポリシェビキに加わり、一時期はウラジミール・レーニンよりも影響力をふるいながら、のちに彼と確執を生じ、政治活動から退くこととなった。「新しい人間」の出現を企図したボグダーノフの知的関心は、きわめて多岐にわたり、1926年には輸血研究所を設立するが、1928年、みずからの身体を供した血液交換実験の最中に命を落とす。早くも「多点的存在」と同年、ボグダーノフのユートピア小説『赤い星』が、大宅壮一の訳で新潮社から出版されている。革命家レオニードの連れ去られた火星は、高度に文明的な集団主義社会であった。火星人の肉体における性差は、ほとんどなくなっており、個体間の血液交換により生命の更新さえ可能なのである。

「灰色の街」で、ささきが最後に引用したジュール・ロマンも、アムステル街での啓示を契機にユナニズムを唱え、作品中に主人公の不在、人物の匿名性を設定した。「我はもう我を愛さない、ユナニム(一体魂)、愛するのはおまえだ!」『一体生活』(1908)。「集団のすべての者が、同時に、そして魂のすべてを込めて、自分たちの集団が存在していると思う日、新しい時が始まるだろう」『神化提要』(1910)。

過去や現在より未来に臨み、集団へと己を投じることで人間の再生を図ろうとする知の潮流にささきが連なっていたことは、「フランシス・ウィラード」(1919)に生硬な筆致のまま表れている。「よし色様々な祖先の血は内部うちに流れてゐても、純白な朝顔は純白な朝顔であつて、其れ以外の何物でもありません。自分を生み出した過去の何者も知らなかつた新境地に立つて、純白な花自身の世界を想像することが出来るのです」。

次に横浜海岸教会の「公会名簿」を見てみる。  
『植村正久と其の時代』2 掲載の同名簿には次の  
ようにある。

明治二己巳正月 当時伊勢  
於横浜 三 鈴木鉦次郎○  
タムソン師ヨリ受洗 元宮津  
金川  
同断 四 鳥屋だい  
築地  
同断 五 小川廉之助  
[佐波：94]

元横浜海岸教会牧師、井上平三郎氏の『浜のとも  
しび』は「公会名簿」に「元宮津 金川」と記  
されているので、「鈴木鉦次郎と同じ宮津出身で、  
金川（神奈川）に居住していることがわかる」と  
されている。しかし、これは単純ミスによる大き  
な誤記である。

他の部分も含め「公会名簿」を見てみると、横  
浜海岸教会への転入会順に漢数字が付された人名  
が記されて、その上に「いつ、どこで、だれから」  
受洗したか、右肩に現在の住所地が書かれている。  
さらに人によっては左肩に明治維新前に属してい  
た藩名が記されている。

要するに、鈴木鉦次郎に関する記述は「明治二  
己巳正月」から「元宮津」までであり、鳥屋だい  
に関するのは「金川／同断 四 鳥屋だい」の部  
分だと考えるのが適当であろう。「同断」は「明  
治二己巳正月 於横浜 タムソン師ヨリ受洗」を  
受けている。

以上のとおり、どうみても鳥屋だいを宮津出身  
とするのは誤読である。ここで正しておきたい。

③浄土・真言・日蓮・浄上真・禅・天台・時宗門  
人別帳

神奈川県立公文書館が所蔵する幕末安政6年作  
成の神奈川宿・神奈川町の宗門人別帳を繰ると、  
「多以」（「だい」と読める）という女性が5人いる。  
10代2人、20代と30代が各1人で、もうひとり  
は63歳である。この63歳の人記されている部分  
は以下のとおりである。

字本町  
高式石六斗五升五合三夕四才  
一百姓 長三郎 ㊦  
当末四十二才  
長三郎女房 つ 祢 ㊦

同 四十一才  
同人母 多以 ㊦  
同 六十三才

(中略)

右百四拾四人之者日蓮宗ニ而拙寺旦那ニ紛無  
御座候

武蔵国荏原郡馬込領池上本門寺末

同国橋樹郡神奈川領青木町

日蓮宗 浄滝寺 ㊦

[浄土・真言・日蓮・浄土真・禅・天台・時宗門  
人別帳：デジタルアーカイブ154コマ目]



神奈川宿の青木町にあった日蓮宗浄滝寺の檀家  
であることを証明する内容である。浄滝寺は開港  
後に英国領事館に使われたことで知られている。

だいは、後に見るように神奈川から横浜の礼拝  
に通っていた。「公会名簿」では「金川」在住と  
されている。横浜海岸教会所蔵の史料「明治三十  
年三月十日 海岸教会歴史要略」には「神奈川  
ノ人……」と記されている。少なくとも受洗から  
後は神奈川宿に住んでいたとみて間違いのない  
であろう。また、これも後に見るように「年老いた  
婦人」であったという。

神奈川町の住人すべてを書き上げた人別帳に  
は、この63歳の「多以」しか該当しそうな者が  
いないのである。

多以の息子で当主である「字本町」の「長三郎」  
とはどういう者なのか。安政6年の23年前の史料  
「小前申渡請印帳 卯之助・千蔵・忠蔵」に神奈  
川町の西之町の百姓として出ている。印鑑が同  
じであることから同一人物だと確認できる。西  
之町は神奈川町の小名である「本町」の中の町  
名であり [深井：126]、神奈川町の中では神  
奈川宿を構

成するもう一つの町である青木町に接する最も西端にあり、本陣や高札場があった宿の中心部に位置する〔新編武蔵風土記稿：神奈川宿項〕。

そして当時の宿の地図を見ると、西之町には、本陣・石井家の2軒隣に「小倉屋」という屋号の「旅籠屋 長三郎」がいるのである〔神奈川県誌：70〕。

人別帳を見ると、長三郎の家には、長三郎・多以外の家族6人に加え下男1人、下女5人、食売（めしうり）女2人の計14人が掲載されており、大きな旅籠屋であったことがうかがわれる。食売女とは、街道の宿屋に広範に存在した、いわゆる飯盛女のごとく、非公認の遊女であった〔吉田：171-172〕。

鳥屋だいについて、井深梶之助は「神奈川に大米屋といふ店をひらいてゐた老婆、同地へ伝道にいつた序に訪問したことがある」と述べている〔佐波：100〕。大米屋も石井本陣向かいの大きな旅籠屋であった〔細見神奈川絵図〕。井深の発言が後年の回想であり、名前は間違えたものの、大きな旅籠屋の主人一家の人であったことを記憶していたと解釈することはできないだろう。

#### 【引用史料】

- ・海岸教会人名簿 第一号（日本キリスト教会横浜海岸教会所蔵、横浜開港資料館寄託）
- ・浄土・真言・日蓮・浄土真・禅・天台・時宗門人別帳（武蔵国橋樹郡神奈川宿本陣 石井家文書、神奈川県立公文書館所蔵・デジタルアーカイブ収録）
- ・新編武蔵風土記稿（巻之七十）
- ・細見神奈川絵図 穆斎 天保一五年（神奈川近世史研究会編『江戸時代の神奈川：古絵図でみる風景』、有隣堂、1994）

#### 【参考文献】

- ・佐波亘編『植村正久と其の時代』2（教文館、1937）。
- ・深井甚三「宿と町」高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門』Ⅱ（町）（東京大学出版会、1990）
- ・吉田伸之『都市：江戸に生きる』（シリーズ日本近世史4、岩波新書）（岩波書店、2015）
- ・『神奈川県誌』（神奈川県誌編さん刊行実行委員会、1977）

- 
- 井上平三郎『浜のともしび：横浜海岸教会初期史考』（地方の宣教叢書5）（キリスト新聞社、1983）160・161頁。
  - 日本キリスト教会横浜海岸教会（横浜市中区）所蔵、横浜開港資料館寄託。

---

### 「日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料をめぐって—」を出版して

熊田 凡子

今年3月に拙著『日本におけるキリスト教保育思想の継承—立花富、南信子、女性宣教師の史料をめぐって—』（教文館）を刊行した。これは、昭和戦前から戦時下及び戦後初期においてキリスト教保育に携った日本人保育実践者たちが記録した一次史料の分析を基に、キリスト教保育の実態と教育実践を支える教育観や子ども観を明らかにし、保育実態史から見た日本におけるキリスト教保育思想の展開を通史的に実証した研究である。

キリスト教保育の営みは、明治初期の「アメリカン・ミッション・ホーム」（1871年）を起点に、アメリカ・プロテスタント系を中心とした女性宣教師たちの研鑽的な幼児教育活動の推進によって継続し発展させ、その女性宣教師たちに学んだ日本人保育者らが、大正、昭和戦前から戦後へと継承させ、現在に至るまでおよそ140年近くの歴史を刻んできた。そうした流れの中で、保育者らは常に神に繋がり人々に繋がり、教育観や人間観を表し伝えてきたのである。どのようなまなざしだったのであろうか。拙著では、そうした実践者たちである立花富（1904-没年不詳）や南信子（1914-2003）の教育実践の様子を読み取る記録（幼稚園修了記念帖、保育日誌、保護者宛の便り、行事プログラム、公文書他）、また女性宣教師アイリン・ライザー（Anna Irene Reiser, 1891-1969、米国長老教会女性宣教師）の報告書等の一次史料に着目した。南信子とは、戦後の日本のキリスト教保育の指導者であり研究者であり、南の恩師が立花富である。その南信子のキリスト教保育の実践に至るまで、女性宣教師M. クック（Margaret Melinda Cook, 1870-1958、米南メソジスト監督

教会女性宣教師)らが広島女学校からランバス女学院時代(1904年から1921年頃にかけて)に営んできた幼児教育を立花富が実践を通じて南信子に継続させていったのである。アイリン・ライザーは、戦後のキリスト教学校復興に尽力し、北陸初の保育者養成校である北陸学院保育短期大学創設(1950年、現・北陸学院大学)・運営に戦前から関わり、南信子を聖和女子学院から招聘すること(1949年)を促した人物である。

キリスト教保育の受容と発展の系譜、女性宣教師の日本の女子教育に与えた影響、幼児教育・保育者養成発展に携わった女性宣教師の人物像、またその具体的方法論や保姆養成観、さらにキリスト教教育論の形成とその変遷の検討など、史料に基づきキリスト教保育の歴史的事実に言及した先行研究がある中で、キリスト教保育の起点の明治初期からその後の大正、昭和戦前から戦後へと継承してきた教育観・子ども観に焦点を当て、一次史料に見る実態からキリスト教保育思想の継続性と、キリスト教保育の日本の幼児教育に果たした役割を検討してみたことが、拙著の一応の成果である。以下の章からなる。

## 序章 課題と方法

第1章 日本の幼児教育の源流におけるキリスト教教育の役割—プロテスタント女性宣教師のキリスト教教育 (安政—) 明治初期1859-1906年

第2章 女性宣教師のキリスト教教育観

—ランバス女学院クック、ピービーおよび北陸女学校ライザーの教育から 明治後期から大正期1906-1928年

第3章 キリスト教主義幼稚園における自由教育の発展—立花富の実践と展開 昭和初期から戦前期1928-1940年

第4章 南信子と立花富を巡るキリスト教幼児教育観・子ども観—戦時下における実態史料を中心に 昭和戦時下(1939) 1940-1945年

第5章 キリスト教保育の一貫性と戦後の新教育 昭和戦後1945-1950年

第6章 北陸地域に女性宣教師の果たした役割 —キリスト教教育の影響 明治・大正期1879-1922年

終章 日本におけるキリスト教保育思想の継承と今後の課題

巻末資料 史料データベース

なお、拙著では、分析に使用した立花富・南信子の一次史料等に関するデータベースを作成している。主に、関西学院聖和短期大学キリスト教教育・保育研究センター、北陸学院史料編纂室に所収されている立花富と南信子によるキリスト教保育の実践が分かる1930年代から1940年代の保育日誌、保護者宛の通知、卒園記念帖、行事プログラム等のデータである。アイリン・ライザーについての史料は、米国長老教会歴史協会(Presbyterian Historical Society)所蔵のライザー宣教師個人ファイル(Foreign Missionary Vertical Files)の内容を、来日前、一時帰国期、戦前期、戦時下、戦後に分類し、データとした(巻末資料総157頁)。

ここで、拙著において指摘したキリスト教保育の連続性とその意義について触れておく。

近代日本における幼児教育史では、これまで、幼稚園草創期から、官立幼稚園(1876年・東京女子師範学校附属幼稚園)と私立なかでもキリスト教主義幼稚園(1881年・桜井女学校附属幼稚園)の2系統の動き(保姆養成も含む)によるものとして認識されてきたが、幼児教育を支える教育観や人間観においては、いずれに対しても女性宣教師らのキリスト教的精神が影響しており、日本人保育者らの実践によってもその精神が保たれているという視点が明らかにされてこなかった。しかし、1人1人の子どもを人格的に受け止め、心の内側から育つことを尊重するキリスト教的精神を基盤とした幼児教育や保姆養成が両者ともにおいて影響を与え、キリスト教主義幼稚園では継続されていたのである。その点について拙著第1章で指摘した。

また、日本の幼稚園教育界では、大正末期の初めての勅令である「幼稚園令」(1926年、戦後「学校教育法」(1947年3月)制定により廃止)から、戦後は学校教育法第79条に基づき、『保育要領』を編集し、幼稚園の教師のみならず保育所の保姆や父母に対する手引きとするとともに「楽しい幼児の経験」を列挙し、幼児の自発的な遊びを重んじた点などを示し、低迷していた幼児教育界に新風を吹き込んだ、と言われている。このように、戦後の民主教育思想によって定められた『保育要領』に基づく幼児教育は、戦後の新しい幼児教育を志向するものとして受容されてきた。しかし、

この戦後新教育は必ずしもアメリカの直輸入ではなく、日本の先覚者たちの研究や実践と共通なものを持っていたのである。それは戦前から展開されていた、幼児のありのままの生活を尊重し自発的な活動を重んじる倉橋惣三（1882-1955）らの保育実践及び思想（1935年）によるものと認識されてきた。ところが他方で、女性宣教師らが発展させてきたキリスト教保育が継続してきたことについては触れられてこなかったのである。つまり、女性宣教師らの教育・宣教活動に影響を受け自ら学んだ日本人保育者たちによる明治・大正・昭和前期に繋いできた教育との関係性については、断絶した教育として認識されていたが実は日本の幼児教育に先駆けていたのである。この点については、立花富の教育実践が、デューイの経験主義に基づくクックの幼児教育の実際で、アン・ピービー（Anne Rosalind Peavy, 1896-1981, 1923年着任）の指導による子どもの自由作業（ピービーの言う創造作業）であり、自由教育そのものであったことから言える。拙著第2章から続く第3章で取り上げた日本人教育者立花富の自由保育の実践過程は、ランバス女学院附属幼稚園（後の聖和女子学院附属幼稚園、現・関西学院幼稚園）における子どもの経験による創造の展開の様子から、日本の進歩主義教育実践の先駆的事例の歴史的事実として明記できる。そうした貴重な実態を読み取ることができる一次史料が残されていたのである。

さらに、第二次大戦前から女性宣教師が不在となった戦時中におけるキリスト教保育の働きの中で、子どもに対する視点や、保育についての考え方、すなわち女性宣教師らから受け継いできた教育的精神が保たれ連続してきたのである。この点については、拙著第4章及び第5章で続けて触れている。第二次大戦前から戦後にかけて活躍した日本人保育者である南信子や功刀嘉子（1905-1996）らが携わったキリスト教保育の実態を示す史料（幼稚園修了記念帖、保育日誌、保護者宛の便り、行事プログラム、公文書他）を基に、日本幼稚園史や学校史の史料を併せて分析することで、戦前・戦時下・戦後という時代の変化の中でも通底する子ども観・教育観について検討できる。戦時中のキリスト教主義幼稚園では、戦時体制下で国民儀礼や戦時協力などの時代的制約に従順に応じ、戦前と異なる姿勢であったとしても、女性

宣教師たちから継承した幼児教育を支える精神は一貫していたことが言える。このように、女性宣教師の幼児教育における教育観・子ども観が、キリスト教幼稚園のみならず、日本の幼児教育界において連続的に影響してきたことを拙著で指摘した。

つまり、幼児教育の最初期から昭和戦後に至るまで、キリスト教保育の精神が日本の幼児教育に影響を継続的に与えていたのである。立花富、南信子、アイリン・ライザーいずれの記録では、子どもに対する尊いまなごしが示されており、こうした視点が共有され継承されてきたと言える。子どもの発想や表現に「感心する」姿勢や「子どもは『イエスさま』と呼ぶ時は本当にリアルである」と受け止めるように、子どもの潜在的で普遍的な賜物を尊重するまなごしを史料が物語っていた。また、これらの史料には、戦時下のキリスト教幼児教育の実態に見る継続性のみならず、キリスト教保育の実践が日本の幼児教育にいかなる影響を与えたのか、検討できる実態が含まれていた。このように、彼女たちが残してきた幼稚園記念帖や保育日誌及び保護者宛の便り、年次報告書等は、一次史料として現代的価値があるものであったと言える。拙著が、立花富や南信子、女性宣教師たちの史料から、キリスト教保育思想と実態の分析に焦点を当てる意義がここにあったと思う。

拙著を発刊し今後残された課題は、南信子の信仰、キリスト教保育で神を天皇や神道の神としていたのかの点、立花富の自由教育の先駆的役割及び人物史、女性宣教師の戦時下の米国日系人収容所での幼児教育の実態及び戦後のキリスト教学校復興における役割についてである。現在、立花富に関する調査と戦時下戦後初期の女性宣教師の活動実態に関する史料調査を行っており、今後の報告に期待していただきたい。

.....

## 例会案内 海野涼子氏

11月19日(土) 午後2時から

場所：横浜指路教会

「エステル・フィンチー日本陸海軍人伝道に捧げた生涯―」

出版記念会になります。

## エッセイ

### 『横浜海岸教会150年史』に関わって

岡部 一興

日本のプロテスタント教会で一番古い教会は、横浜海岸教会です。その教会がこのたび、去る7月15日に『横浜海岸教会150年史』を出版しました。この出版を祝して、7月24日に出版感謝会がこの日の礼拝後開かれました。執筆に関わった方々は、11人でした。

2017年11月のこと、どのような教会史が可能かということで説明しました。それは、この研究会に海岸教会の会員である長老の川村洋士さんと飛田妙子さんがいた関係から声が掛かったのです。その時、『横浜指路教会百二十五年史』の執筆をしたので、それも参考に話をしました。教会史は、神の栄光をあらわすもの、長老主義教会の形成の伝統を受け継ぐもの、過去の過ちを素直に認めるもの、日本のキリスト教会全体のなかで指路教会の位置づけに留意して叙述するものといったものを基本に書いたと言いました。そして、どのような教会史の編纂が可能かということでは、6つの教会史の事例を述べました。①本格的な教会史として通史を編纂する。②詳しい年表を作成、それに「教会の今昔」を古い教会員に依頼、教会の思い出、これからの教会などの記事を書く。③現教会員が記憶に残っている時代から現在までの所を叙述する方法。海岸教会でしたら渡辺連平牧師時代から2022年3月の創立記念までを叙述。④写真を多く取り入れて、写真で見る教会史を編集する。⑤教会員全員に執筆を求めて編集する方法で、教会と私、教会の思い出、信仰の歩みなどの記事を書いて頂きまとめる。⑥教会が保管してきた重要な資料を1冊の本としてまとめ、巻末に年表を入れる。いずれの年史を作成するにしても年表を入れる必要があると述べました。さらにどのような教会史を編纂するにせよ、どのような方々が信仰生活をしてきたかを顧みることが大切であるという観点から、創立から現在までの信徒名、信徒の受洗年月日、転入者、転出者の名前とその年月日を記録にとどめることが大切であると述べました。

横浜海岸教会は日本で一番古い教会なので、是非通史を編纂して欲しいという提案をしました。そうしたところ、上山修平牧師から専門家がいな

いので、③の現教会員が記憶に残っている時代から現在までの所を叙述する方法を取りたいという答えが返ってきました。

それから暫く経って、2020年10月だったでしょうか。「岡部さん」通史をやりだし、出来上がってきましたと川村さんから聞きました。

「それはよかったですね」と言いました。その後、2021年2月に読んで欲しいと言われました。正式には翌月の3月末の日曜日の午後の編纂委員会で、目次の作り方、時代区分、各編各章のどこが問題かということを指摘させて頂きました。結論的には、第2篇の稲垣信牧師から第Ⅲ篇の笹倉彌吉牧師までの箇所を小生が執筆することになりました。考えてもない事でした。編さん委員9名、編集には合同会社ヘウレーカの森本直樹さんが加わり、アドバイザーとして岡部が参加しました。森本さんが実に丁寧な編集をして下さったおかげで、立派な教会史ができました。神に感謝したいと思います。

ここに600頁の教会史が出来上がりました。本文475頁、資料125頁で、資料の内容としては、「規則」、「洗礼・転入者一覧」、「長老・執事一覧」、「教情一覧」、「横浜海岸教会現住陪餐会員」、「年表」となっています。

なお、詳しいことは、今後の例会でこの教会史を祝して発表させて頂きますのでご期待して頂きたいと思います。

#### 【編集後記】

会報72号をお届けします。ウクライナの侵略で驚いたのは、ロシア正教会のキリル総主教がプーチン大統領を全面的に支持。ルーマニア正教会司祭で世界教会協議会(WCC)総幹事代理のイオアン・サウカ師がキリル総主教に戦争を止め流血を避けるため対話と交渉を通じて平和をもたらしてほしいと訴えました。しかし、聞き入れられませんでした。ウクライナ正教会はロシア正教会との断絶を宣言。どうしたら停戦し、平和をもたらすことができるかを世界の為政者は考えるべきです。

横プロ研では、対面とズームで例会を続けます。会員の皆さま、毎月の発表者、紹介して頂けると助かります。また、このような研究発表を希望しますといった意見でも結構ですので、ご意見をお願い致します。(岡部一興)